岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』　第三十四巻「社会科学（一の四）」

国防、軍事、安全保障、戦争、テロリズム、戦史、外交、条約、国際問題、国難

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十四巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、国防、軍事、安全保障、戦争、テロリズム等に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
第二編　二十歳～二十九歳
（編集中）
国防、軍事、警察
自衛隊
核兵器の不保持及び対凶悪犯罪国家・元首への対応
警察及び海上保安庁の権限、漁業の死守
テロリズム、カルト宗教、暴力団への対応
情報自衛隊及び日本語の重視
第三編　三十歳～三十九歳
第一部　過去の対日テロ事件との比較から今後の対策を考える
～イスラム過激派とオウム真理教を同種・同質集団と見たアメリカの現代感覚の良し悪しを踏まえて～
第二部　日本が現地に残した文化やインフラを大切にするパラオ・太平洋の人々から日本人の私が学びたいこと
第三部　大日本帝国陸軍岡山歩兵第十連隊・岡山近衛兵将校子孫会（岡将会）
第一章　岡将会
第二章　岡将会の概要と設立事情
第三章　会員と郷土岡山
第四章　日本軍大本営・中央政府による岡山贔屓（びいき）と岡山見放しの歴史
第五章　岡山歩兵第十連隊帰還兵の生存状況と証言の共通点について（終戦後に渡る激闘と現在までの悲痛）
第六章　『大日本帝国陸軍　歩兵第十連隊（岡山・鉄五四四八部隊）戦史調査資料』紹介ページ
第七章　『大日本帝国陸軍　歩兵第十連隊（岡山・鉄五四四八部隊）戦史調査資料』
第八章　ＮＨＫ「戦争証言アーカイブス」の岡山歩兵第十連隊、近衛師団、およびそれらの帰還兵についての無料特集番組・証言インタビューの一覧
第九章　在日米海軍司令部（CNFJ）からの要請と本会からの情報提供
「出征の際の日の丸国旗への寄せ書き」の分析調査（二〇一一年十二月二十一日～）
第十章　大東亜共栄圏内の和歌文化（歌壇）の一覧（内地＝本土を除く）
（琉球、台湾、朝鮮、中国、満州、サイパン、パラ

オ、樺太）

第四部　科研費助成による研究調査　クンストカメラ（ロシア・サンクトペテルブルク）所蔵　ニコライ二世（当時皇太子）宛献品の解読・所見：　能面・武具の銘文、アイヌ民族の刀剣文化（タンネップ（飾太刀）・エモシ（太刀））や戦史に関する資料、諸岡マツの書状、宮内省『外賓接待録四』、絵巻物（茶道に関するもの））

第四編　四十歳～四十九歳

第五編　五十歳～五十九歳

第六編　六十歳～六十九歳

第七編　七十歳以降

第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第三編　三十歳～三十九歳

第一部　過去の対日テロ事件との比較から今後の対策を考える
～イスラム過激派とオウム真理教を同種・同質集団と見たアメリカの現代感覚の良し悪しを踏まえて～

二〇一五年二月一日　起筆、擱筆、公開

目次

■日本人人質の殺害
■過去の対日テロ事件に対する欧米キリスト教諸国（特にアメリカ）の態度を振り返る
（「どれもイスラム過激派のテロ」という意識）
■三つの対日テロ事件の比較（地下鉄サリン事件、シガチョフ事件、ISIS 日本人拘束事件）
■海外産・日本産テロリズムの双方に警戒しなければならない点は変わらない
■参考文献・サイト

■日本人人質の殺害

ついに後藤健二氏までもが ISIS に殺害されたと思われる動画が今朝、YouTube にアップロードされた。政府も、殺害されたのが後藤氏本人で、これまでの動画と同様、合成・細工などはないとしている。

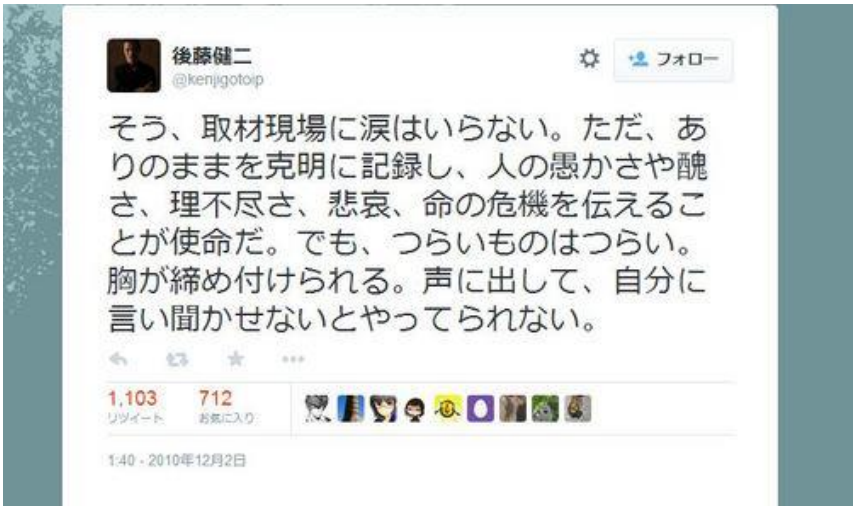
新鮮な感想が衰えないうちに、今回の一連の日本人拘束事件について頭にあることを書きたい。

◆取り上げるテロ事件
（一）地下鉄サリン事件（一九九五年三月二十日）
（二）シガチョフ事件（二〇〇〇年三月～二〇〇一年七月十三日）
（三）ISIS 日本人拘束事件（二〇一四年八月～二〇一五年二月）

今回のテロ犯罪も、我々個々人の日常生活にとっては遠い出来事ではあるし、事件をあまり重く深くはとらえない人も多いようである。氏名も顔写真も出さずに無責任な書き込みができる Twitter や掲示板では、日本人二名の拘束動画をコラージュした画像・動画がアップロードされたり、直接 ISIS 戦闘員のアカウントに書き込みがなされたりし、ISIS から反応があったりなど、実際に非政府レベル、SNS・サブカルチャーレベルで ISIS を刺激していたことも大変に印象に残った。

早速、YouTube が規約違反として淡々と削除してきた今までの ISIS の斬首動画を転載しアーカイブを作成しているカルト宗教・テロリズム関連ウォッチングサイトで、斬首動画の一部始終を見たと

ころ、やはり斬首実行者は、これまで同様「ジハーディー・ジョン」のようである。（一方で、実行者は別にいて、「ジハーディー・ジョン」は映像でのコメントと斬首のフリのみの担当であるという説も飛び交っている。それ以上の詳細は不明。）



ISISによるジェームズ・フォーリー氏殺害以降、同じ日本人として上記のような揶揄・コラージュ文化に対しても嫌な思いをしていたので、それをかき消すような意識で、自分の目で「ジハードのジョン」による斬首動画を全て見てきたが、ナイフを首に当てられる直前に、後藤氏が覚悟を決めたように自ら目を瞑って準備していたのが、かえって後藤氏の生前の活動の積極性を暗示させられるようであった。

（右は後藤健二氏の生前のTwitterでの言葉。）

などと感じていたところ、早速、時事通信が「ほとんど身じろぎしない。首にナイフが当てられると覚悟を決めたように目を閉じた。」と報道していた。「動画における個人の一挙一動の情による解釈」に触れるのは、こうして個人のブログでの感想にとどめたほうがよいのではないか、権威あるマスコミにおいて述べても大丈夫なのだろうか、と少し心配になった。

これまで日本はテロの標的になりにくかったからか、「やはり自分たちは無宗教の日本人でよかった」という人も多くいるし、私だって内心そう思うのだが、最大のムスリム人口を抱えつつ過激派が少ないインドネシアでさえ、無宗教は禁止されており、無宗教を名乗ると、運が悪ければ政府当局に密告されて逮捕されることもある。ムスリムにとって、アッラーフという存在がどういうものか、まずは比較的過激派の少ない（または、まだ影をひそめている）イスラム国家から勉強するのがよいのかもしれない。

すでに後藤氏の件に関して、「もっと多くのジャップ（Jap）が後藤氏のような刺身になることを望む」と書き込んでいる親ISIS派の

人たちや小グループも欧米圏に多数おり、彼らにとっては、「無宗教の日本人」は「一億人規模のアメリカ従属教というカルト宗教」という意識なのかもしれない。

それにしても、動画が合成だ、いや合成でないとか、後藤氏の声だ、いや別人の声だ、後藤氏のまばたきがモールス符号になっている、いやなっていないなど、日本国民どうしで分析結果が最後まで真っ二つであったのは、いったい何だったのだろう。ISIS のメディア部門「フルカーン」が、わざと「合成のように」作って撹乱し、それに我々日本人がまんまと引っかかったのだろうか。よく分からない。

こういう動画は、「人類の悲惨な歴史の記録（アーカイブ）」としては、むしろネット上に残されなければならないと思う。「玉石混交」の情報社会の中で、徹底して「玉」を集める一方で国民に見せる「玉」と隠す「玉」とを選別せざるを得ない政府の行動と、「玉」も「石」もとりあえずネットワーク上に流しておくテロリズムウォッチャーの行動と、両方が五分五分に存在するのがよいと思う。

■過去の対日テロ事件に対する欧米キリスト教諸国（特にアメリカ）の態度を振り返る

（「どれもイスラム過激派のテロ」という意識）

私は個人的には、今後も日本においては、ISIS などのイスラム過激派によるテロよりも、日本国内のカルト宗教・新宗教団体によるテロのほうが高確率で起きやすいと考えている。というより、ISIS のようなイスラム過激派思想の影響をもろに受けやすい危険性を持っているのは、日本国内のムスリムであろうはずがなく、カルト宗教・新宗教団体、そして、ごく一般の一部の社会人・学生・大学教員などのほうだと考えている。

そして、あくまでも個人的なカルト宗教・テロリズム事件ウォッチャーとしての見解にすぎないが、二人の日本人が ISIS に拘束された最初の動画を見て、なぜか私は、一見すると共通点のなさそうなシガチョフ事件（ロシア人によるテロ）、そしてその契機となった地下鉄サリン事件（日本人によるテロ）のことをふと考えた。

しかし、よく思い出してみれば、これら二つの対日テロ事件は、多くの欧米のキリスト教諸国、特にアメリカが、当初アラブ・イスラム過激派テロリストの犯行と見ていた事件である。なるほど、「見誤ることがある欧米諸国の目」というつながりから、これら二つのテロ事件を思い出したのだ。欧米の報道各社にも、当初イスラム過激派の犯行と勘違いして報じたところがあった。

そして何より、ISIS の前身のアルカイダこそ、かつてアメリカが組織したムジャーヒディーン集団であるわけだが、アメリカ同時多発テロ事件をはじめとして、今やアメリカが最も扱いにくいテロ集団となってしまったようである。

今回の ISIS による日本人の拘束・殺害を一つの契機として、今後の対日テロ対策を冷静に（ある意味では冷徹に）考えていきたいと

思うならば、「欧米諸国（の政府・報道機関）の目には、第一印象の段階では、イスラム過激派であろうが日本のカルト宗教であろうが、とにもかくにも〝この種のテロ〟が全く同種の〝イスラム的な何か〟として片付けられる蛮行と映る」ということは知っておいたほうが無難であろうし、やはり私としては、それが欧米、特にアメリカのキリスト教市民社会の功罪であるとも考えている。

これは見方を変えれば、欧米諸国、そして欧米諸国に追随する中東やアフリカの親欧米政権の、「テロはテロで、どの宗教を標榜していても先進国の人権意識やキリスト教精神の敵であるから空爆する」という非常に分かりやすい態度が、他国で起きたテロの緻密な分析・選別、もっと言えば宗教学的・理念的な微妙な差異をすぐにとらえる嗅覚のようなものをあまり持たない、ということを意味しているように見える。

もっとも、例えば、欧米諸国がロシア人が起こしたシガチョフ事件をイスラム過激派の仕業と見た理由も、無理に探そうとすれば、無くは無いと思う。現在の ISIS の戦闘員の内訳を見ても、アラブ人・ムスリムに次いで、ロシア人はチュニジア人と同じくらい多く、イギリスやフランスからの参加者数をしのいでいる。

ISIS に限らず、チェチェン紛争時代からずっと、イスラム過激派に占めるロシア人の割合は高い。イスラム過激派思想もオウム思想・シガチョフの思想もソ連崩壊後のロシア人の精神性に肯定的に響きやすかった共通点があるという意味では、欧米（あるいは旧西側・NATO 側）諸国の目にはなかなか区別は付きにくいのかもしれない。

ともかく、おそらく今述べたような「テロ＝イスラム教そのものが内包する傾向・欠陥」と見てしまうようになった欧米諸国の一足飛びの態度は、今後の対日テロ分析に対しても適用される態度かもしれないわけだから、その点は日本人である以上、心しておいたほうがよいと思う。

しかしやはり、そういったキリスト教精神を中軸とする先進国にオウム真理教のような日本産カルト宗教の思想を「イスラム教の影響を受けたテロ集団」と間違えて片付けられてもらっては、一般のムスリムや日本人が困ることになる。特にアメリカにその傾向が強いのは、かつて自らが組織しておきながら手に負えなくなったアルカイダを突き放して以来、他国の過激派の区別があまりつかなくなったからなのかもしれない。

以下のように、欧米諸国がイスラム過激派と勘違いしたサリン事件とシガチョフ事件を起こしたオウム真理教は、「教義」上はイスラム教から最も遠いところから生まれているのである。そして、最終的に「同種・同質のテロ集団」となっただけで、今回挙げる三つのテロ事件は、「イスラム」とはもはや無関係の国際犯罪なのである。

サリン事件の九五年には、私はまだ小学六年生だったから、CNN などが「アラブ・イスラム過激派の犯行」と報じたことはのちに様々な文献から知ったのみであるが、シガチョフ事件に関しては、アメリカ市民までもが誤解してネットでイスラム過激派を非難していながら、日本ではこの事件の存在そのものがほとんど放映されなかっ

たことを覚えている。

■三つの対日テロ事件の比較（地下鉄サリン事件、シガチョフ事件、ISIS 日本人拘束事件）

さて、改めて三つの対日テロ事件を挙げてみよう。そのあとに、それぞれの共通点と相違点が分かりやすいように、事件の特徴を列挙した。

◆取り上げるテロ事件

（一）地下鉄サリン事件（一九九五年三月二十日）

（二）シガチョフ事件（二〇〇〇年三月～二〇〇一年七月十三日）

（三）ISIS 日本人拘束事件（二〇一四年八月～二〇一五年二月）

●報道各社の第一報

（一）アラブ原理主義・イスラム過激派の犯行

（日本の公安当局がオウム真理教の犯行と見たのちも、欧米諸国、特にアメリカではイスラムの犯行と報道。）

（二）アラブ原理主義・イスラム過激派の犯行

（日本の公安当局がロシアのオウムの残党の犯行と見たのちも、欧米諸国、特にアメリカではイスラムの犯行と報道。当時は、直前に第二次インティファーダ、アルカイダによる米艦コール襲撃事件などが発生。直後にアメリカ同時多発テロ事件が発生。）

（三）アラブ原理主義・イスラム過激派の犯行

（今回は、首謀組織が積極的にサイト・YouTube・Twitter などで声明・動画を公開。日本や欧米諸国に残された行動は、その動画などの真偽や合成の有無の分析であって、従来のような「テロ＝イスラム教そのものが内包する傾向・欠陥」という態度による間違いは起こり得なかったと思われる。）

【参考】

ちなみに、キリスト教原理主義者の青年によるノルウェー連続テロ事件においても、当初欧米諸国の多くは、便乗したイスラム過激派によるネット上のニセの犯行声明を見破ることができず、「イスラム過激派のテロの可能性」を報道。

●事件におけるインターネットの使用（事件時点でのインターネット情勢）

（一）未使用。当日まで秘密裏のテロ計画。

（Windows 95 の発売直前。ネットは未成熟だが、事件前の九四年に日本の首相官邸がウェブサイトを初めて開設。その他の政府機関もサイトを次々と開設。教団が首相・閣僚などの動きを精査。）

（二）使用。麻原死刑囚の思想を実現しない場合のハルマゲドン・全人類の滅亡の訪れと、日本人大量殺戮・日本破壊計画の構想をインターネット上で記述。

（Google も YouTube もなかった時期で、ほとんどの日本国民は当事件の事前の知識が皆無。）

(三) 使用。メディア部門「フルカーン」および複数のウェブサイト・Twitter アカウントを有して日本人人質の殺害を警告し、YouTube に犯行声明・殺害動画をアップロード。

（使用している SNS・動画サイトや携帯型端末そのものは、一般の日本国民と全く同じ。）

●事件の結果（見逃した機関当局、阻止した機関当局）

(一) 既遂。阻止できず。

(二) 未遂。見逃し：東京入国管理局、警視庁、福岡県警　阻止：FSB（ロシア連邦保安庁）

(三) 既遂。阻止できず。

●首謀組織（首謀者・実行犯）

(一) オウム真理教

（首謀者：麻原彰晃、指揮・サリン製造・サリン散布・運転・運搬等の各省庁長官・幹部をはじめとする実行犯十数名）

(二) オウム真理教のロシア人信者

（首謀者：ドミトリー・シガチョフ、他ボリス・トゥペイコら幹部四名、協力者十数名）

(三) ISIS（ISIL、イスラム国、DAIISH）

（首謀者：アブー・バクル・アル＝バグダーディー、他「ジハードのジョン」ら実行犯数不明）

●首謀組織の統治体制・国家転覆計画

(一) 国家を標榜し、省庁制を採用。ハルマゲドン（の捏造）。

「日本シャンバラ化」を計画（日本国の打倒、東京都民・国民の大量殺戮、天皇・首相・議員の殺害、新聞社への襲撃、オウム国家の建設）

(二) 「日本シャンバラ化計画」の再興。ハルマゲドン（の捏造）。麻原彰晃の奪還。

(三) 国家を標榜し、行政・司法・警察機関などを設置。中東・トルコ・アフリカ・イベリア・ウイグルに至る統一カリフ・イスラム国家の建設。

●「殺人」の隠語（原典には以下のような過激な意味はない。）

(一) ポア、救済、精進（全て「殺人」そのものと曲解）

(二) 同上

(三) ジハード、キサース（「殺人」や「レイプ」と曲解）、ディーヤ（「欧米が支払うべき血の賠償金」と曲解）

●被害者

(一) 死者十三人、負傷者六千人以上

(二) 未遂

(三) 死者二人（全世界の死者・負傷者数は不明）

●思想的支柱・原理（自称）

(一) チベット密教、原始仏教、ヨーガを中心とし、儒教、道教、ゾロアスター教、キリスト教を混在させた「真理」の追求

(二) 同上

(三) イスラム教スンニ派、サラフィー・ジハード主義

●組織の規模、国籍、兵力

(一) 一万人以上（日本人。東京大学・早稲田大学など一流大学出身の有能者、医師、科学者、弁護士などが幹部・省庁大臣に就任。出家・在家信者に分かれる。）

(二) ロシア人信者三万人以上（日本国内の信者の数倍）、教祖に忠誠を誓うテログループが複数存在し、うち一つがシガチョフのグループ

(三) 戦闘員一万人～三万人？（支配下にある住民は一千万人？）、アラブ人・パレスチナ人・ロシア人・チュニジア人・エジプト人・欧米人・ウイグル人（民族）・中国人（漢民族）・日本人などが参加

●女性・女児の扱い

(一) ハーレムを形成（ダーキニー）、新規入信女性の選別によるダーキニー登用

(三) 性奴隷として誘拐、現世におけるフーリー（「天女」ハーレム）の養成・強制的性労働

■海外産・日本産テロリズムの双方に警戒しなければならない点は変わらない

こうして見てくると、今後、日本として対日テロを阻止していくために重要なことは、「何の情報分析もしていないのに、組織の構成・行動・統治体制・国家志向などが似ているからという理由だけでとりあえずイスラム教関連のしわざにしておく、という態度を日本は持っていない」ということを、世界に、特に空爆の主導者アメリカ、そして今回日本政府が頼ったヨルダンなどの空爆国に対し、徹底的に発言していくことなのかもしれない。

そもそも防ぐべきものは、イスラム教との交流でさえなく、海外産テロリズムまたは日本産テロリズム（日本人によるホームグロウン・テロリズム）なのであるから、日本国内の一般のムスリムよりも、仏教カルトや神道カルト、一部の社会人・学生などのほうがISISの思想の影響を受ける可能性があると見るのが妥当ではないだろうか。

ISISのテロと全く同様に、これらをも阻止する態度を明確にし、法整備を進めていかなければならない。

私は普段、政治的立場がお互いに全く異なる場所に出入りすることもあり、むしろ観察していて日本人による同士討ちテロの不安の

ほうを身近に感じることが多いのだが、それもあって今回のようなブログ記事を即日書いておいた。

■引用元サイト

後藤健二(@kenjigotoip) Twitter
https://twitter.com/kenjigotoip（二〇一〇年十二月二日の記事）

■参考文献・サイト

Jihadi John（ジハードのジョン）
http://en.wikipedia.org/wiki/Jihadi_John

“ FALSE PROPHET: THE AUM CULT OF TERROR”
crimelibrary.com
http://www.crimelibrary.com/terrorists_spies/terrorists/prophet/1.html（リンク切れ）

オウム真理教対策（警察庁）
https://www.npa.go.jp/archive/keibi/syouten/syouten269/sec03/sec03_04.htm

オウム真理教（公安調査庁）
http://www.moj.go.jp/psia/ITH/organizations/ES_E-asia_oce/aum.html

破壊活動防止法（昭和二十七年七月二十一日法律第二百四十号）
http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S27/S27HO240.html

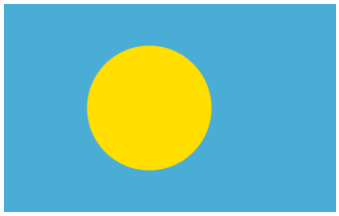
「イスラム国」と過激派の実像（時事ドットコム）
http://www.jiji.com/jc/isk

「身じろぎせず覚悟の表情＝後藤さんとみられる男性」（時事ドットコム、二〇一五年二月一日）など
http://www.jiji.com/jc/isk?g=isk&k=2015020100030

「後藤さん殺害か　祈るように目閉じる」（日刊スポーツ、二〇一五年二月一日）
http://www.nikkansports.com/general/news/1428900.html

第二部　日本が現地に残した文化やインフラを大切にするパラオ・太平洋の人々から日本人の私が学びたいこと

二〇一五年四月十三日　起筆、擱筆、公開



天皇・皇后両陛下がパラオを訪問されたことにちなんで、戦後の日本や太平洋の文化について、個人としても日本人としても色々と考えました。

（右はパラオ国旗）

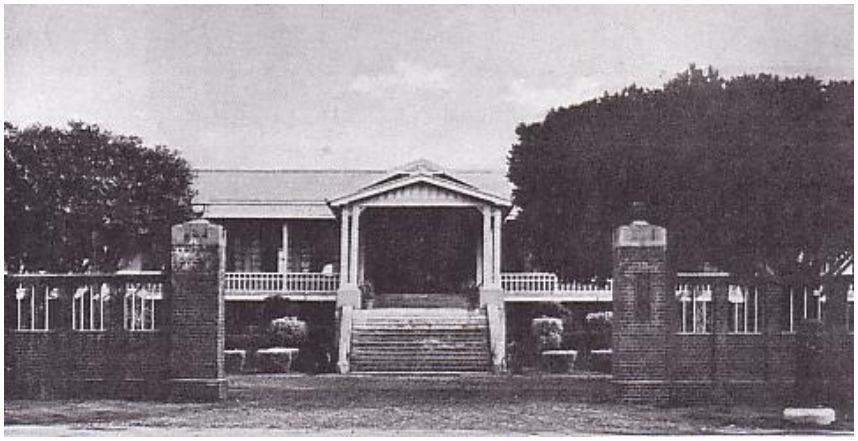
パラオは今でも大変な親日国・親皇室国ですが、今回の天皇・皇后両陛下のご訪問についても、現地の政府高官・警察官から一般市民・子供たちまでもが、事前に日の丸掲揚や『君が代』・『仰げば尊し』・『蛍の光』斉唱を練習したり、日本が援助した道路・橋・電気・水道などのインフラを徹底的に清掃したりなど、驚くほど歓迎されている様子でした。

『蛍の光』は、元のスコットランド民謡のメロディーに稲垣千穎が日本語詩を付けたものです。戦前には、NHK連続テレビ小説「マッサン」でエリーが歌っていたようにスコットランド英語と日本語の両方で歌われ、戦時中には、敵国のメロディーだからという理由で学校の卒業式では歌われなかったにもかかわらず、帝国海軍では歌われ、それが戦後には、パラオの人々が日本語で継承し、日本人・皇室を迎えるために歌い、一方で日本の学校の卒業式では、盛り上がれない歌だからという理由でどんどん斉唱が廃止され、代わりにJ-POPを歌って踊っているわけです。「いったい何なんだ、これは」としか言いようがない皮肉な気分です。

天皇・皇后両陛下がパラオを訪問されたことについて、右派団体から左派団体（特に反戦・反原発・フェミニズム団体・NPO団体）まで、様々な意見があるようですが、両陛下のご意向としては、そういった政治的問題から超然として「全ての戦死者を悼み、平和を願う」以外の何物でもないと思います。そこから学ぶべきことは多いと私自身は感じています。

それにしても、やはりご訪問先としては、あくまでも「無難な」ペリリュー島の慰霊碑などの場所だけで終わってしまうのは仕方がないと思います。結局、もう二度と日本の天皇・皇后両陛下が訪れることのない「正当な歴史から排除されたアウトサイドな」場所というのもあるわけです。それは、皇室さえも（天皇が政治的発言をすることが許されない象徴天皇制のために）もう触れることのできない「歴史の間隙」なのだと思います。

「日本のマスコミも宮内庁も腫れ物として触れようとしないもの」というのが、あるはずだと私は思います。そこをえぐらないと面白くない気分です。



日本の南洋庁による委任統治からアメリカの信託統治に移行して以降、現在まで、パラオを日本領に入れてほしいと願っているパラオ国民は少なくありませんが、立派に独立国として対等な関係を築けた以上、今になって日本編入が良いとは限りませんし、あえて日本に入る必要はないと思います。

（右は南洋庁庁舎）

それよりも、朝日新聞の「従軍慰安婦」捏造問題と同じく、昭和天皇や軍部を中心とする韓国・中国・グアム・サイパン・パラオ人女性たちに対する組織的な性奴隷化の国策があったと考える日本国内のフェミニズム団体などの発言力の現状を考えれば、パラオ国民の悲願は今後も日本国内で表立って報道されることは少なく、私のように個人レベルで「無思想・中立の事実」だけを知りたい日本人が、自分で海外の裏ニュースサイトで知って、パラオ国民と日本の戦死者の双方に個人的に心の中だけで感謝を示していく以外に方法はないだろうと考えています。

私個人の感想ですが、「感覚的に」戦争の悲惨さやパラオの歴史・現状を直視できているのは、日本のマスコミでも右派・左派団体でも親原発・反原発団体でも反戦・フェミニズム・NPO 団体でもなく、やはり天皇・皇后両陛下と、一部の知的洞察力と感覚的鋭敏さを持つ国民のみではないかという感慨があります。

パラオの戦前・戦中・戦後の歴史や現状については、私自身は、かつて戦前・戦中に日本が創建したパラオの各神社（ペリリュー神社、アンガウル神社、南洋神社、朝日神社など）の巫女さんの子・孫・ひ孫に当たるパラオの巫女さんたちを訪ね続けている日本の神社の巫女さんたちを通じた、文芸（和歌）や工芸の事情くらいしか知識がなく、政治的なことは分かりません。単に和歌をやっているというだけの薄いつながりで、「友人の友人から聞きました」程度の「また聞き」の知識が多いです。

（右は南洋神社の一九四〇年の鎮座祭）

（ちなみに、私が個人的に数名のご協力を頂いて作成している「旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧」の「海外歌壇の形成」の部には、パラオをはじめ、琉球、台湾、朝鮮、中国、満州、サイパン、樺太の和歌の実状を追って掲載しています。何か情報をお持ちの方は、ぜひご連絡いただければ幸いです。）

「旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧」

http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/kado.htm

（二〇一八年七月九日に追記：現在は『全集』に収録。）

先述の神社は、アメリカの信託統治への移行後にほとんどが廃社となり、それらの廃墟・残骸や、かろうじて息をひそめて生き延びた小神社は、現在は現地の神官・巫女さん・有志の市民と日本からの有志の巫女さんたちによって管理されています。

南洋神社など、再建された大神社もありますが、規模的には以前よりもずっと小規模なものです。それに、日本からの有志の巫女さんと言っても、旧社格制度における下級神社の、現在は国や自治体や神社庁や神社関係の単立宗教法人から見向きもされない小神社の巫女さんばかりです。南洋神社を官幣大社に列するなどかつてのパ

ラオの神社に対する日本の厚遇があった時代とは、天と地の差がある状況です。

敗戦後に日本の自民党政府もGHQも（まるで西洋文化に対する東洋文化の敗北であるかのように）放置した神社をパラオの巫女と市民が愛したという事実を、日本のマスコミが表立って報道することはないと思います。このほか、サイパン島、テニアン島、ロタ島、ヤップ島などにも神社がありましたが、基本的には残骸程度のものが残っているか、ちょっとした歌会・歌壇が残っている程度のようです。

これらの神社は、日本政府とGHQによる無視・放置をチャンスと見た右派団体や指定暴力団が主宰する団体、「日本－パラオ心を結ぶ会」や「南洋交流協会」が再建に関わっていた面があることはありますが、その目的は極めて日本・パラオ間の文化交流を軽視した日本優生思想的なもので、主宰神の天照大神を祀る神聖な宗教施設としての神社（ひいてはパラオの巫女や国民）のあり方ともまた異なっていたがために、神社を管理している現地パラオの巫女や住民の意志ともかなりぶつかって、結局頓挫しているものが多いです。

むしろ、戦時中に南洋庁は、パラオ文芸・工芸の衰退を阻止するために、現地の村民を集めてきて、文芸品・工芸品を作らせています。例えば、伝統的なトコベイ人形の職人を絶やさないために、コロール島、トビ島、アラカベサン島などから村民を呼んできて作ら

せていました。

和歌についても、今では、台湾やサイパン、パラオの歌壇が島から和歌文化が消えないようにと歌人たちが必死になっています。そして、なおかつそれぞれの島々の伝統文化も継承しているのです。

（右は日本の委任統治領時代のコロール）

一九四四年のペリリューの戦いでは、日本軍がパラオ住民を事前に強制退避させたために、パラオ住民の死者はゼロ名と言われ、一方で日本兵の死者は一万人を超えましたが、今となっては、島民の生命や文化に対する日本の姿勢と対応はそれでよかったと思います。ここで生き残ったパラオ住民たちの子・孫・ひ孫たちが、先述の日本文化・パラオ文化双方の担い手となっているわけです。

私は別に三島由紀夫のような作家でも南方熊楠のような民俗学者でもありませんが、こういうことに興味や感慨が湧くかどうかは、個人の「美意識」や「文化意識」、「生き方」そのものが関わると感じています。私などは、日本のマスコミや宮内庁や右派・左派団体の動向とは全く関係のない「下っ端」のところで、日本の巫女さんとパラオの巫女さんとの質素ながらも濃密な交流があると聞くだけで、一種の爽快感を覚えます。

右派思想と左派思想の両方から最も離れたところに「日本」があると考えたり、そのことを天皇・皇后両陛下の姿勢から学んでいると考える思考の人にとっては、「右派と左派の対立を天皇主義と反天皇主義、日本派と反日本派の対立」ととらえる昨今の思考がどうしても低俗に思えてなりません。

天皇・皇后両陛下にとって、パラオご訪問は「悲願のライフワーク」でしたが、もしその中に政治的問題から超然とした、平和的な宗教施設としての神社や心の交流としての文芸文化の継承といった点が含まれていたなら、やはり個人的には、日本の多くのマスコミや右派・左派団体よりも天皇・皇后両陛下の「日本観・戦争観」のほうが清く正しいと思うばかりです。

また、パラオの人たちが日本が援助した交通網やインフラを守ろうとしたり、日本が残してきた神社や文芸を守ろうとしたりしているところに、何らかの「思想」を持って手を出そうとするならば、それが右派団体であれ左派団体であれ、かつてのパラオ在住日本人や南洋庁とパラオ原住民との絆の歴史を邪魔するものでしかないと思います。

【参考文献・画像出典】

●『官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖』（海外神社（跡地）に関するデータベース　神奈川大学非文字資料研究センター）（パブリック・ドメイン）
http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/syoseki/004.html

●『南洋群島写真帖―昔の micronesia』（小菅輝雄、グアム新報社東京支局、一九七八）

●大坪潤子「南洋群島に神社をたずねて」（『非文字資料研究』第六号、神奈川大学二十一世紀COEプログラム研究推進会議、二〇〇四年十二月）

●冨井正憲、中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン「旧南洋群島の神社跡地調査報告」（神奈川大学二十一世紀COEプログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第二号、二〇〇五年三月）

●中島三千男、津田良樹、冨井正憲『『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因』（神奈川大学二十一世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』、神奈川大学二十一世紀COEプログラム研究推進会議、二〇〇七年十二月）

【関連するブログ記事】

●私の和歌人生史、平成日本における伝統和歌の現状（その一）
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/50386486.html

●私の和歌人生史、平成日本における伝統和歌の現状（その二）
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/50713456.html

第三部　大日本帝国陸軍岡山歩兵第十連隊・岡山近衛兵将校子孫会（岡将会）

灰塗りの「防衛省」の箇所に関する特記事項

二〇一八年四月二十三日　起筆、擱筆、公開（追記）

防衛省への資料提供に関しては、自衛隊日報問題などに見られる通り、その省としての公文書管理の能力と意識の双方の保持が極めて疑わしく、岩崎も戦史資料の著作者・提供者及び日本国民として個人的に著しい疑念を生じていることから、防衛省への戦史資料の提供は中断する。また、国民（戦史調査団体、戦友会、軍人の親族・子孫等）から提供された貴重な戦史資料の保管の状況や方法について、今後も防衛省に随時問い合わせる。

第一章　岡将会

大日本帝国陸軍 岡山歩兵第十連隊・岡山近衛兵将校子孫会

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年十月八日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

岡山歩兵第十連隊関連情報

◆最多時総兵員：　約三七〇〇名（将校約一五〇名）
◆一九四五年八月十五日終戦時点生存者：　約五〇〇～八〇〇名
◆一九四五年九～十月生存者・帰還兵数：　一五〇～二七二名のいずれか
◆戦死率（被弾死・爆死・自決・餓死・戦病死・刑死）：　九二～九五％
◆二〇〇五年時点ご存命者：　約三〇名
◆二〇一五年時点ご存命者：　五名（将校三名）

←岡山歩兵第十連隊と近衛師団が NHK で特集されました。現在も無料でご覧になれます。

フィリピン最後の攻防　極限の持久戦　～岡山県・歩兵第１０連隊～
NHK「証言記録　兵士たちの戦争」
（放送日：二〇〇七年八月二十二日）
フィリピン最後の攻防　極限の持久戦　～岡山県・歩兵第１０連隊～

昭和二十年八月十五日　玉音放送を阻止せよ　～陸軍・近衛師団～
NHK［証言記録　兵士たちの戦争］
（放送日：二〇一〇年五月二十九日）
昭和二十年八月十五日　玉音放送を阻止せよ　～陸軍・近衛師団～

←ご連絡・メール（岡山の部隊・軍人に関する情報・証言など）がございましたら、本会専用のメールアドレスまたは代表の岩崎純一までお願いいたします。

本会のメールアドレス：
okayama@iwasakijunichi.net
（二〇一八年七月九日に追記：現在はアドレス廃止。）

←思想的側面の研究

神道・仏教研究

←本会の会員（岡山県内の神社の巫女）が参加する和歌の会

伝統和歌の会「余情会」

特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

本会（略称：岡将会）は、岡山歩兵第十連隊と岡山県出身の近衛師団・近衛連隊の将校（士官）の子孫を中心とする戦史・郷土研究団体です。とりわけ歩兵第十連隊について、自分たちも九割が戦死する中、大本営、南方軍、方面軍、師団から何を命令され、部下の兵士たちに何を命令し、戦後に何に苦しんだかを、無為の境地で研究します。

本会は元々、岡山県出身・東京都在住である代表の私（岩崎純一）による、岡山の祖先や郷土部隊、岡山出身の近衛兵についての在野・個人研究として始まりました。その中で、私一人ではフィールドワーク・訪問できない岡山県やフィリピンの土地などについて、該当する岡山県民にご協力いただいているうちに、一応「会」と名乗るに至っています。

ご協力下さっている岡山県民（岡山県内の神社の巫女など）には、岩崎純一のウェブサイトから派生した伝統和歌の会「余情会」のメンバーが多く、むしろ私の和歌研究やこの歌会が先にあった上で、本会が設立されました。従って、和歌研究や歌会活動の中で得られた神社・巫女・社家との交流ルートや吉備・岡山の郷土文化研究ルートを、本会の基盤の一つとさせていただいています。

研究費用は、ほぼ岩崎の私費で負担しております。

戦史・郷土史の研究

私の郷土岡山の戦争史、とりわけ旧大日本帝国陸軍の岡山歩兵第十連隊や岡山県出身の近衛兵将校について研究しています。前述の和歌に関する活動でご一緒させていただいている歌人の方々にも、ご協力いただいております。

第二章　岡将会の概要と設立事情

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年三月十三日　最終更新

私の学術研究かつ趣味の延長とも言えますので、私以外のメンバーには研究上の義務などはございません。ただし、メンバーの方や、岡山郷土部隊兵の子孫の方、岡山県出身の近衛兵の子孫の方は、情報をお寄せいただければ幸いです。

岡山県内には、県知事・国会議員・岡山県護国神社宮司などを顧問とする大規模な岡山県遺族連盟がありますが、我々の会はこの連盟とは全く無関係で、子孫の有志による、独立した小さな学術研究団体です。

第三章　会員と郷土岡山

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年八月十九日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

会員と血族軍人の関係（将校名簿は別掲）
岡山大空襲による歴史の損失　-神社・巫女家・社家（「元伊勢」など）への被害-

会員と血族軍人の関係（将校名簿は別掲）

※　これらの情報は、下方の「岡山出身の近衛兵・幹部将校の家系の特徴」や「在日米海軍司令部（CNFJ）からの依頼　『出征の際の日の丸国旗への寄せ書き』の分析調査」の内容を考察する上でも重要なものとなります。このほかに情報をお持ちの方は、ぜひご連絡いただければ幸いです。

※　ここでの血族軍人は、血族または血族養子を指し、非血縁養子を除きます。

本会での主な担当
氏名（巫女は社家としての氏名）
血族軍人の所属部隊と最終位置
血族軍人に対する続柄と系統
血族軍人の近衛兵への抜擢の理由
会員本人から八親等以内の血族軍人の苗字

代表
岩崎純一
近衛歩兵連隊（東京・皇居）、岡山歩兵第十連隊（ルソン北部）：二名帰還

曽孫、孫（父系、母系）
華族身分を持たない武家・地主系教職からの近衛兵への特例的登用（「岡山藩、高梁藩、岡山県、広島県、国家に対する勲功」）
岩崎（旧阿哲郡・阿新地方系岩知道・岩藤家傍流）、岡本、黒住（黒住教開祖・黒住宗忠遠戚傍流）、津村、池田

現地調査担当
北川良子
近衛歩兵連隊（東京・皇居）、岡山歩兵第十連隊（ルソン北部）：爆死・餓死
曽孫、孫（父系、母系）：戦後は男系断絶、女子のみ。
勲功華族（男爵、「国家に対する勲功」）、岡山藩・岡山県神社社家
赤澤（金光教開祖・金光大神傍流）、白神、津田、土井原、土肥原（A級戦犯・土肥原賢二遠戚）

現地調査担当
一条みさお
近衛歩兵連隊（東京・皇居）、岡山歩兵第十連隊（ルソン北部）：餓死
曽孫、孫（父系、母系）：戦後は男系断絶、女子のみ。
勲功華族（男爵・子爵、「国家に対する勲功」）、岡山藩・岡山県神社社家
花房（旧邑久郡邑久町大名家）、虫明、藤原、守安

現地調査担当
道満幸江
岡山歩兵第十連隊（ルソン北部）：爆死・餓死
曽孫、孫（父系）
なし
池田、小野、岩崎（旧阿哲郡・阿新地方系岩知道・岩藤家傍流）

現地調査担当
吉川りせ
近衛歩兵連隊（東京・皇居）、岡山歩兵第十連隊（ルソン北部）：一名帰還
曽孫、孫（父系、母系）：戦後は男系断絶、女子のみ。
岡山藩・岡山県神社社家
岡本、黒住（黒住教開祖・宗忠遠戚傍流）、藤原、吉川

◆ご協力者・証言者一覧
歩兵第十連隊帰還兵、岡山県住民、岡山県護国神社、岡山県や全国の神社の巫女・社家（後述の巫女を含む）、伝統和歌の会「余情会」（長満たき・戸井留子・樋川夜涼・青柳香織・武田あさゑ・江波戸優花・北川良子・一条みさお・吉川りせ）

岡山大空襲による歴史の損失　-神社・巫女家・社家（「元伊勢」な

ど）への被害・

本会には、岡山県内の神社・社家の巫女の皆様が参加して下さっておりますが、これは元々本会が、代表の岩崎による国文学・哲学・民俗学・精神病理学などに関する在野・個人研究の延長として成立したためです。

（岩崎純一のウェブサイトから派生した、全国や岡山の和歌を研究する伝統和歌の会「余情会」や、巫女に見られる解離性障害・憑依障害・身体表現性障害などを含む精神諸現象の研究などが元。）

ところで、我々会員の先祖である岡山の郷土部隊や岡山出身の近衛兵への言及の前に、我々の郷土が受けた大空襲の被害、そして私（岩崎）を除く会員の実家である巫女家・社家が受けた被害を見ておきます。

岡山大空襲（一九四五年六月二十九日）の被害は、隣の広島が受けた原爆の被害に比べれば天と地の差ですが、それでも罹災者数十二万人、死者一七三七人、負傷者六〇二六人、罹災戸一二六九三戸で、市街地の七〇％以上が焼失しました。そのような中、広島市への原爆投下の際には、「特殊爆弾」が投下された可能性と広島市の状況についての第一報（広島市郊外にいて無事だった同盟通信記者の中村敏による）を岡山支社が受容し、これを東京本社、そして大本営に伝えるところとなりました。広島・岡山両市の粉骨砕身の賜物と言えます。

岡山大空襲の特徴は、被害が一般市民・民家および文化財に集中しており、歩兵第十連隊の拠点を含む津島地区の陸軍兵舎・兵器廠は、ほぼ無傷で残っていることです。米軍は、「小都市の住民の未来を真っ黒にする」旨の「目標情報票（Target Information Sheet）」において岡山市を名指ししており、最初から軍事拠点への攻撃ではなく市民殺戮・住宅地焦土化を意図したものと考えられます。従って、後述のような部隊の壊滅状態で何とか帰還した岡山の兵士が、銃後の家族に二度と会えなかった事態も生じています。

岡山には、第五の元伊勢神宮（「元伊勢」）たる名方浜宮（なかたのはまみや）が多く存在し（『倭姫命世記』に豊鍬入姫命の巡歴として記載あり）、吉備国内宮（岡山伊勢内宮）はその中心でした。いわゆる伊勢市の伊勢神宮内宮のおよそ四十年前に創建されたと考えられますが、岡山大空襲で吉備国内宮は失われました。

全国の内宮のうち、爆撃で焼失した内宮は岡山のもののみとなっています。岡山の郷土史を有史以前、朝廷・日本誕生以前から知りたい岡山県民の目で見れば、『古事記』・『日本書紀』や『風土記』の解読に影響を与える致命的な損失ですが、当時の米軍がそのような重大さを考慮に入れるはずもありません。これも戦争の悲劇の一つということでしょう。

吉備国内宮の祭祀・秘儀などを執り行っていた神官・巫女の家（神官家・社家）は、同内宮の焼失と小規模での再建後は、一般家系となっているほか、同内宮や県内の他の元伊勢の社家として細々と存続している家系もあります。ただし当然、華族制度や近代社格制度の廃止により、多くは現代的な職業としての神職・巫女となってい

ます。

岡山県内の他の元伊勢には、伊勢神社、穴門山神社、神明神社などがあり、吉備王国時代（領域は岡山県～広島県東部～兵庫県西部～香川県島嶼部～徳島県東部～和歌山県西部）を含めると、今伊勢内宮外宮（広島県福山市）、伊勢部柿本神社（和歌山県海南市）、国主神社（和歌山県有田郡有田川町）などがあります。

第四章　日本軍大本営・中央政府による岡山贔屓（びいき）と岡山見放しの歴史

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年三月十三日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

岡山という土地柄　-日本神話・吉備王国と大東亜戦争-
岡山県出身近衛兵の悲運　-「非華族系エリート戦士」への期待-
岡山歩兵第十連隊の悲運　-「吉備王国戦士」への期待-

岡山という土地柄　-日本神話・吉備王国と大東亜戦争-

現在、岡山県は、両隣の広島県や兵庫県よりも人口が大幅に少なく、県庁所在地の岡山市は、政令指定都市中で人口が最小の都市です。両隣の県庁所在地たる広島市、神戸市に大幅に遅れて、しかも人口や人口密度よりも「平成の大合併」による面積肥大によって政令指定都市をぎりぎり勝ち取ったにすぎない上、熊本市、静岡市、浜松市など他の政令市や中核市にも人口で追い抜かれています。

しかし、岡山・倉敷は、江戸時代末期までは山陽地域における枢要な城下町・商家町でした。それ以前に、岡山地域は、大和朝廷に反抗的だった出雲王国などに比べれば、中立的な吉備王国として、古事記・日本書紀や吉備豪族の時代から朝廷と強い結びつきを持ってきました。

県内には、縄文・弥生文化や古代吉備王国の繁栄により、国内最大級の墳丘墓（楯築墳丘墓など）、大和朝廷に次ぐ規模の古墳群（造山古墳など）、マヤ文明型ピラミッドの仏教遺跡（熊山遺跡）など、有史以前、朝廷・日本誕生以前に遡らなければ実態が分からない物珍しい史跡が多くあります。

このような歴史的経緯から、明治に入った時点で、岡山藩は薩長土肥などの雄藩に次ぐ規模を有し、県全体で見ても、爵位を与えられ華族に列せられた者・家、あるいは士族とされた者・家の数は、両隣の二県を大幅に上回っていました。明治天皇を戴く中央政府に

よる、期待されたとも恐れられたとも考えられる優遇措置です。吉備国は現在の岡山県と広島県東部を占めていた上、廃藩置県によっても現在の広島県東部（福山市・庄原市など）が小田県・岡山県に編入されていたことも影響していますが、当時はまだ、同地域の住民の帰属意識自体が岡山のほうに向いていました。

岡山の華族・士族には必然的に、皇室・公家・貴族・武家と血縁・姻戚関係にある家が多くなっています。しかし、岡山の華族には、京都や奈良や東京と違って、公家・貴族・社家系華族（旧華族）よりも、「新華族（勲功華族）」と呼ばれる大名・武家や政治家、実業家の華族の家系が多くなっています。

首相の犬養毅も、組閣流産で有名な宇垣一成も、A級戦犯として死刑に処せられた土肥原賢二も、岡山県出身です。敗戦後の一九五二年、昭和天皇第四皇女の順宮厚子内親王が、元華族・岡山藩当主ながら池田牧場（のちの池田動物園）の経営者の顔を持つ池田隆政に嫁いだことは有名な話です。地元では、「日本男児の中で実力勝負で皇女に辿り着けるのは吉備戦士だけだ」と、大げさな文句も聞かれました。

最近では、橋本龍太郎や江田五月も岡山出身ですし、岡山周辺の他の「郷土」にも基盤を据える片山虎之助（おおさか維新の会共同代表）や片山善博（元鳥取県知事）も岡山出身、平沼家（平沼騏一郎、平沼赳夫など）、鳩山家（鳩山威一郎、鳩山由紀夫、鳩山邦夫など）、菅家（菅直人など）も岡山県がルーツ（または岡山県出身）です。

あるいは、宗教の発祥や開祖の輩出が極めて多く、浄土宗宗祖の法然や臨済宗宗祖の栄西も岡山県出身です。「幕末三大新宗教」と呼ばれた新宗教についても、二つは岡山県発祥で（金光教と黒住教。残る一つは天理教）、岡山藩の民・岡山県民はもちろん、孝明天皇・皇族・公家・貴族・岡山藩・武家・華族・士族からの帰依・尊崇も受けて発展しました。

どんな神仏の仕業か分かりませんが、岡山・吉備地域とは、昔からそういう土地柄であり、そういう風が吹いているのでしょう。そういう風の吹き回しのまま、かつての戦争にも突入していったわけです。岡山県は、「開戦時までは」天皇・大本営・東京中央政府の恩寵・優遇をあからさまに受けた土地です。

そのような風の吹き回しの表れとして、第十連隊歩兵と、陸軍の花形と言われ天皇・宮城を護衛する任務を担った近衛兵の、両方を輩出している家系がいくつも存在します。私（岩崎）のように、明治以来、父系・母系の双方が第十連隊歩兵の家系と近衛兵の家系のいずれかである子孫もいます。

また、岡山県出身の近衛兵・幹部将校には、黒住宗忠・黒住家や金光大神（赤沢文治）・赤沢家と血縁・姻戚関係にある軍人が少なくありません。私（岩崎）自身も、黒住教開祖とは二十親等以上離れており、黒住教教徒でもありませんが、一応は黒住家傍流を先祖に持っています。

金光教も黒住教も、戦前は教派神道たる神道十三派に分類されていたため（現在は、特に天理教と金光教で、神道・仏教・キリスト

教を折衷した教義が見られる）、教会は神社・神宮そのものであり、これら新宗教の巫女・社家も存在します。特に黒住教は、古い神道色を残しています。

当然、県内の神社本庁所管の神社や古くからの巫女家・社家と軍人の関係にも深いものがあります。岡山県護国神社、吉備津神社、吉備津彦神社、今村宮、岡山神社、熊野神社などの大規模神社はもちろん、伊勢神社、葦守八幡宮、備前国総社宮、牛窓神社などの県内の神社には、岡山県出身の近衛兵・幹部将校の子孫の巫女たちが奉仕しています。私（岩崎）が最も関心を持っている要素の一つです。

我々は、岡山の郷土部隊や岡山県出身の近衛兵の栄光と悲運の両方を考えるにあたり、このような壮大な歴史的経緯（当時の大本営・東京中央政府・日本国民＝皇民が持っていた神話・宗教・郷土意識、日本人の気質、岡山県民の県民性）についても、数百年・数千年レベルの視野で見つめることが必要だと考え、探究しています。

考えてみれば、「日本三大奇祭」の一つとされる西大寺会陽（裸祭り）などの岡山の祭りは、岡山なりの土着的で屈強な県民性があるがために、残り続けているのかもしれません。

結局、岡山と皇族・華族・士族の縁、岡山と神道の縁、岡山と新宗教の縁などは、全て同じ問いの別称であり、日本神話や大王・豪族時代からの吉備・岡山の土着的特質であり、ひいては後述のように、不幸にも当時の大本営・中央政府による無謀な期待の根拠として利用されることになったわけです。

岡山県出身近衛兵の悲運 -「非華族系エリート戦士」への期待-

以上のような歴史的経緯を踏まえて、岡山の軍人・兵士たちに期待された過剰な「精鋭性」について、まずは岡山県出身の近衛兵から見ていきます。

本会が岡山の近衛兵から共通して聞いてきた感懐は、「士族・武家・卒族（足軽・同心）・農民出身の屈強な心身を持つ男子が多かった岡山の近衛兵は、品行方正すぎるイエスマン集団としての近衛師団・近衛連隊内部において、やや異質な優遇と期待を受けたが、それだけに実動部隊として動かされ、苦しかった」というものです。これがどういうことかを考えてみます。

近衛兵とは、禁闕守護（きんけつしゅご）や鳳輦供奉（ほうれんぐぶ）といった、天皇・宮城を護衛する特殊任務に当たる兵士であり、やがて近衛連隊、そしてその上部組織たる近衛旅団・近衛師団が整備され、それらのもとで任務に当たるようになります。

（「近衛兵」とは、古い用語で、師団・連隊整備後は「近衛歩兵」・「近衛騎兵」などと具体的に呼ぶのが普通ですが、「近衛兵」でも構いません。「近衛歩兵連隊」を「近歩（きんぽ）」とするなど、略称も多く使われました。）

近衛兵は、一般の徴兵にも志願にもよらず、文武両道・品行方正・質実剛健、国家に対する勲功ありなどと認められた家系の男子から選抜された精鋭部隊であるため、志願したところで近衛兵になるこ

とは到底無理でした。

ただし、その近衛兵の中でも、岡山県出身者は、様々な歴史的・神話的・土地柄的な事情から重用される傾向にありました。これを理解するには、明治初期から戦前戦中期までの華族制度と近衛兵の実態から見なければなりません。

近衛兵の選抜にあたっては、文武両道・品行方正・質実剛健や勲功という条件でさえ、当初は建前であって、実際には家柄・出自や親族の犯罪歴などに関する憲兵隊による身上調査が最優先で行われました。まずは華族、次いで士族の家系の男子から近衛兵が多く抜擢され、その結果、近衛師団・近衛連隊は当初、貴種血族の「天下り先」のような状況にありました。皇太子も、まずは近衛歩兵とされました。従って、前述の歴史的経緯を踏まえれば、岡山県出身の近衛兵にも、まずは華族、次いで士族出身者が多いことは、容易に予想がつきます。

近衛師団・近衛連隊は、日本軍が善戦していた一九四二年までは、そもそも皇居が米軍・連合軍に爆撃・砲撃された際に前線に立って応戦したり、天皇・皇族・公家が殺害されたりするような最悪の事態をほとんど想定していないため、華族などの貴種血族の軍人・兵士の安寧な天下り先になるのは当然のことでした。とりわけ、近衛歩兵第1連隊と第2連隊は、戦わないことにその価値があるような部隊でした。本腰を入れて宮城の御文庫を昭和天皇の防空壕として強化し始めたのは、昭和二十年五月の空襲による宮殿への延焼後のことです。

華族制度自体は、当然現憲法では（表向きは）禁止されている特権的な優遇を伴う栄典制度であり、明治の当時でさえ、爵位乱発による新華族（勲功華族）の激増などの様々な問題もありました。しかし、岡山に華族・士族が多いというだけなら、古代の吉備王国から江戸末期の岡山藩や備中松山藩に至る岡山の繁栄の実情を踏まえたものであり、当時の大本営・中央政府による「岡山びいき」とまでは言えないことは確かです。

問題なのは、近衛兵は、血を流す戦闘に優先して禁闕守護（きんけつしゅご）や鳳輦供奉（ほうれんぐぶ）の任に当たるといえども、天皇・宮城を「体を張って」防衛する軍隊であることに変わりはないにもかかわらず、当初の選抜では身分にこだわりすぎた（華族・士族の男子というだけで多数重用された）ことです。

アメリカや連合軍に勝利するための戦闘力・軍の統率力と家柄の良さとは何の関係もないはずですが、実際は体格・覇気に乏しい華族の男子も召集されていました。もちろん、戦況の悪化と共に、次第に粗雑な再編と外地出兵が繰り返されるにつれ、体格問題はむしろ解消に向かい、部隊の性格も好戦的・反動的になっていったようです。元より、一部の近衛兵らが秘めていた反動的な性格は、二・二六事件に近衛師団・近衛歩兵第2旅団・近衛歩兵第3連隊が反乱軍を出したことを見ても分かります。

ところが前述のように、岡山県から輩出された華族・士族には、当初から公家・貴族・上級武家出身の華族・士族だけではなく、本来華族・士族に列せられることができない身分ながら勲功で華族・

士族になった者・一族が多くなっています。勲功華族は当初、旧華族からは格下と見なされました。しかし、勲功華族出身の近衛兵の抗戦能力は、当然一目置かれるものがありました。

また、私（岩崎）の家系のように、中級武士・地主・教職の家系から陸士を経て近衛兵に抜擢された場合もあります。このような家系は、本来なら旧華族から見れば煙たい存在だと言えますが、いよいよ戦況が悪化し、近衛兵でさえ外地に駆り出されて戦闘を展開するようになるにつれ、岡山のような地方出身の屈強な近衛兵に異様な期待と重圧がかかるようになります。

当然、背水の陣において前線に立ったのは、勲功華族や非華族、士族・卒族以下の身分の地方兵士でした。こうして、岡山の近衛兵たちには、日本神話的・素戔嗚尊（スサノオノミコト）的な英雄性が付与されていき、知らず知らずのうちに重い責任を負わされることになります。

赤柴八重蔵大佐（岡山歩兵第十連隊長、近衛第一師団長）

戦況の暗転期に近衛第一師団長に抜擢されたのは、岡山の郷土部隊である歩兵第十連隊（後述）の連隊長であった赤柴八重蔵でした。本籍は新潟ながら、姫路・岡山で育ち、この地域の戦士たちを指揮してきた赤柴は、彼らの勇猛果敢さを身に染みて知っていました。

しかし、近衛兵の「イエスマン」気質の典型的な、かつ最後の顕在化と言える「宮城事件」では、多くの岡山県出身の近衛兵も巻き込まれ、捏造された命令で動かされる結果となりました。多くの近衛兵が、陸軍省将校の井田正孝中佐、椎崎二郎中佐、畑中健二少佐らの策謀に騙されて宮城を占拠することになり、岡山の兵士たちも東京（一部はマレーやスマトラ）で悲運に散ることになりました。

ただし、宮城事件でも、一部の連隊長や大隊長、そして中隊長以下の各郷土出身の近衛兵たちは、「玉音盤を探し出して放送を阻止しろという命令を森赳近衛第一師団長が下すはずがない」と考えており、彼らに亡き森師団長のニセ命令を直接伝えることになった師団参謀の古賀秀正少佐の様子をも、不自然であると疑っていたのでした。

岡山歩兵第十連隊の悲運 ・「吉備王国戦士」への期待・

さて、岡山の郷土部隊に目を向けてみます。岡山の郷土部隊には、歩兵第十連隊（鉄五四四八）とその留守部隊・後発部隊の歩兵第百十連隊（鷲三九一一）、歩兵第五十四連隊（月七三八五）とその留守部隊・後発部隊の歩兵第百五十四連隊（兵一〇一一四）があります。

岡山歩兵第十連隊

本会が中心的に扱っている岡山歩兵第十連隊は、帝国陸軍中、最古参の郷土部隊の一つです。日中戦争で抗日ゲリラとの激闘を展開した後、部隊の三分の一を失った状態で一度帰還し、再度満州へ赴き、警護に当たります。

しかし、すぐに第二次世界大戦・太平洋戦争が勃発したため、人員補充を重ねながら、フィリピンのルソン島に移動し、米軍への斬込（きりこみ。肉弾攻撃）で多くが爆死・玉砕しました。その後も、終戦後の一九四六年まで、フィリピン人抗日ゲリラやフクバラハップ（抗日ゲリラの一つ）、米兵ゲリラ（ユサッフェ・ゲリラ）と死闘を繰り広げ、敗北しました。

幹部将校を含む各歩兵は、岡山・倉敷・総社・笠岡・高梁・新見・真庭・津山・美作・和気・備前などの各地から満遍なく徴兵されているほか、姫路・神戸・広島からも少数徴兵されています。

ところで、岡山歩兵第十連隊も、下記リンクの NHK の特集番組で近衛師団と同じく「精鋭部隊」と紹介されています。ただし、精鋭部隊である所以は、単に文武両道・品行方正な兵士が多かったという意味だけではなく(NHK はそうとのみ表層的に理解している傾向にあるようですが)、別の意味もあったということは、我々岡山県出身者としてはすぐに感じ取ることができます。帝国・天皇をより直接的に守護する近衛師団・近衛連隊に準じる扱いを受け、それに恥じないだけの「吉備王国戦士」としての戦果を挙げるよう実力の限界以上の期待をされ、いわば「依怙贔屓（えこひいき）」されたという側面もあったでしょう。

元より、かの「宇垣軍縮」を断行する中、歩兵第十連隊を正式に姫路から岡山に転営させたのは、岡山県出身の陸軍大臣で、幻の首相に終わった宇垣一成でした。日本の陸軍歩兵部隊の「郷土部隊」という編成方式のもとでは、同じ日本軍・同じ師団の配下部隊であっても、それぞれに異なる性格を期待されていたことが垣間見えます。

隣の姫路・神戸・広島の部隊（第十師団の歩兵第三十九連隊など）や、その昔大和朝廷に抵抗し異文化を築いた出雲地方・松江の部隊

（第十師団の歩兵第六十三連隊）などと違って、岡山歩兵第十連隊（第十師団）には、岡山県出身の近衛兵に対するのと同様、日本神話的・素戔嗚尊（スサノオノミコト）的な英雄性を持たされていますし、当時の岡山県民自身が、それを兵士らに期待し彼らを鼓舞しなければ、とても戦争に耐えきることができなかったという側面もあるでしょう。

開戦当初の大日本帝国・日本軍、そして近衛兵や岡山の部隊のイメージが日本史上のどの時代にまで遡って作為的に形成されていたかが、如実に分かります。

しかし、いくら神話的・英雄的な期待をかけられたからと言って、持っている戦力以上の戦力を人間が出せるはずがありません。現実の戦況は、前述のような理想的な岡山の青年像とは無関係のことです。

しまいには、歩兵第十連隊の岡山の兵士たちは見放され、ルソンに取り残されます。ルソンでの「吉備戦士」の戦闘の結末は、下記の戦史資料の通り、太平洋戦線部隊中、最悪のものとなりました。台湾やレイテ決戦などに関する大本営の虚構発表がもたらした結末です。

こうして、岡山の郷土戦士たちは壊滅状態で内外から帰郷しますが、それを迎え入れた岡山県民は、それぞれの郷土戦士たちを迎え入れた広島県民や兵庫県民に比べて、意外にも落ち着き払っており、熱狂的態度をとらなかったようです。自分たちが郷土戦士に込めた英雄性が、それだけ過剰なものだったということなのかもしれません。

第五章　岡山歩兵第十連隊帰還兵の生存状況と証言の共通点について（終戦後に渡る激闘と現在までの悲痛）

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年三月十三日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

本会の調査したところによると、連隊の中国戦線における最多時の兵員は約三七〇〇名、フィリピン戦線における最多時の兵員は約三二〇〇名で、うちフィリピン戦線で約三〇〇〇名が戦死（被弾死・爆死・自決・餓死・戦病死・刑死）、一五〇名～二七二名が内地帰還しており、二〇〇五年時点で確認できたご健在の帰還兵は約三十名、二〇一五年時点で確認できた方は五名のみです。

下方のリンクから無料でご覧いただけるNHKの同連隊についての特集番組（二〇〇七年）で証言されている帰還兵も、ほとんどがお亡くなりになっています。

本会会員の全員が、帰還兵から生まれているか、帰還兵が帰還後

にもうけた子から生まれていますので、その奇跡には驚愕を覚えます。ただし、帰還したことすなわち生きて帰ったことは、当時は恥であり、「非国民」の悪評との戦いの開始であり、かつ戦地にて自分の両脇で戦死した戦友を弔う人生の開始をも意味しました。

さて、岡山歩兵第十連隊の帰還兵から我々子孫が共通して聞いていることは、以下のことです。

（1）フィリピン戦線中、最古の連隊で、かつ最後に満州からルソン戦線に投入され、最後まで残って戦闘し、生存者の数は最少であった。

（2）サイパンの戦い、マリアナ沖海戦、台湾沖航空戦、レイテ島の戦い、レイテ沖海戦の全てにおいて日本軍が大勝利し米軍が壊滅状態であると、大本営かつ第14方面軍から発表があったため、それに基づいてフィリピン上陸・決戦の方針を立てたが、その発表は捏造・虚構で、連隊が上陸した時点で、戦艦武蔵は海の底であり、太平洋戦線・フィリピン全土で敗北必至であった。

当時は、フィリピンには「とどめを刺しに行く」のであって、背水の陣で「米軍の本土上陸を遅らせるためだけに戦い、敵陣に突進・爆死する斬込（きりこみ。肉弾攻撃）要員になる」とは知るよしもなかった。しかも、沖縄戦・本土決戦開始後や原爆投下後も、大本営や第14方面軍から情報を隠された。

今度は逆に、我々歩兵のほうが、日本軍から来た情報も米軍から来た情報も全て疑う態度になった。一部の歩兵には、岡山県人としての独立独歩の戦闘心が芽生えた。日本軍が日本軍を殺したようなものだと現在も考えている。

（3）一九四五年八月半ばから突然、米正規軍の爆撃が停止し、降伏奨励のビラを米軍にばら撒かれ、代わりに現地のフィリピン人抗日戦線やフクバラハップ、米兵の残党が南部方面から現れて攻撃してくるようになり、おかしいとは思ったが、戦闘は軍人の使命であり、終戦の可能性を考えなかった。

（4）第八師団（とりわけ秋田の歩兵第十七連隊）や、同郷岡山の歩兵第百十連隊には申し訳ない。

秋田歩兵第十七連隊は、連隊長の藤重正従大佐の命令で、フィリピン人抗日ゲリラ虐殺部隊と、それを拡充させたフィリピン住民虐殺部隊を有しており、歩兵たちが虐殺を担わされたため、最後に投入された我々歩兵第十連隊は、戦死・餓死・戦病死者は多く出したが、「人を殺す」ことに手を染める必要がなかった。

岡山歩兵第百十連隊は、虐殺部隊は持たず、中国が現在主張する「三光作戦」という名称も使ったことはないが、「治安作戦」や「粛正（粛清）」という語は、我々と共に岡山にいた頃から使っており、その後、計画通りに中国人殺害を行った。我々歩兵第十連隊が中国でも「人を殺す」ことに手を染めずに済んだのは、同郷の同志たち

の行動を尻目に我々だけがルソンに行くことになったからであって、我々の部隊が特別に神聖だからではない。

（5）最後の最後で（終戦後に）連隊から多大な戦死者・自決者・餓死者が出ており、フィリピン人や米兵の残党との殺し合いとなった。

◆（1）～（5）の意味するところについて

ルソン島決戦の敗北は、直接的に太平洋戦争そのものの敗北につながっていますが、終戦後のルソン最後の戦闘は岡山・姫路・松江・鳥取など、山陽・山陰の郷土歩兵が展開しました。

姫路の歩兵第三十九連隊や松江の歩兵第63連隊は、やや早く捕虜収容所に収容され、内地（日本本土）に引き揚げていますので、最後の最後は、岡山の残留兵が抗日ゲリラやフクバラハップ、米軍の残留兵と戦う構図になりました。

ところで、満州からのルソンへの移動では船団の最後につけ、上陸・戦闘開始も遅れましたので、何もかもが遅かった連隊だということになります。

一方で、連隊そのものは、フィリピン戦線中、最古の歩兵部隊ということになります。西南の役でも戦い、父子二代の同連隊歩兵もいました。岡山県出身の宇垣一成によるかの「宇垣軍縮」により、正式に姫路から岡山に転営しました。生存者も、各連隊中で最少であるため、おおむね（1）は真実であります。

レイテ決戦などでの日本軍大勝利の虚構発表は、今となっては有名な話ではありますが、各連隊は本気で大勝利と信じました。（2）から（5）は、全てその虚構発表がもたらした負の遺産です。天皇・大本営に忠誠を誓ってきたこの連隊が、次第に天皇・大本営にも米軍にも抵抗し、単独でのゲリラ戦に突入していくのは、必然のことでした。

フィリピン人抗日ゲリラやフクバラハップ、米兵ゲリラは、日本軍が優勢だった一九四二・四三年まではマニラやルソン南部で日本軍に抵抗していました。その勢力が最後の最後で北部の歩兵第十連隊に到達したのは、終戦によって、情報受容が早かったルソン南部の都市部の日本軍が降伏・停戦したことで、ゲリラの北上を許したからです。また、すでに日本軍は壊滅状態で、ゲリラ北上は時間の問題でもありました。

マニラ市街戦・南部決戦の頃に連隊長の藤重正従大佐のもとでフィリピン人虐殺部隊を有した秋田歩兵第十七連隊も内地へ帰還し、ゲリラ化したフィリピン人遺族の報復攻撃は岡山の歩兵に向けられました。にもかかわらず、岡山の帰還兵が秋田の歩兵に申し訳ないと思ったのは、秋田の歩兵がルソン南部でフィリピン人虐殺を担ったがゆえに、岡山の歩兵が自らほとんど手を下さずに済んだことに思いを巡らせたためです。

また、歩兵第十連隊が、中国で部隊の三分の一を失う激闘を展開し、今度はすぐにフィリピンに向かう事態になったのに対し、同郷

の岡山歩兵第百十連隊が中国に上陸した頃には、すでに徐州会戦の終盤でした。にもかかわらず、第十連隊の帰還兵が第百十連隊に申し訳ないと思ったのは、その後、自分たち第十連隊がフィリピン戦線でもはや上記のような壊滅のみを経験したのに対して、第百十連隊はそのまま中国で抗日ゲリラとの戦いに邁進し、帰還後も良心の呵責に苦しむこととなったことに思いを巡らせたためです。

確かに、岡山県発行の『岡山県史』や『岡山県郷土部隊史』、岡山・十五年戦争資料センター発行の『「岡山郷土部隊」は何をしたか』や『岡山の記憶』に描かれるのは、歩兵第百十連隊の中国における中国人粛正の「蛮行」ばかりで、著述・編集を担当した岡山県民自身（特に、兵士遺族、小中高等学校の教師、県内大学の教員）もそれを徹底的に強調し、（私の視点では、かなり過剰にすぎる）中国に対する懺悔の念を示す傾向にあるほどです。

一方で、歩兵第十連隊については、餓死や戦病死で壊滅したことが記されるばかりで、フィリピン人殺害の記録は見当たりません。ただし、前述のような事情を考えれば、どの部隊がどの土地でどの任務を誰の命令で担うことになるかが単に運命の違いにすぎないことだけは、よく分かります。

中国における岡山歩兵第百十連隊の立場は、ちょうどルソンにおける秋田歩兵第十七連隊の立場に類似しています。その代わりに、歩兵第十連隊は、どの部隊にも増して、肉弾攻撃による爆死、自決、餓死、戦病死を経験することとなりました。

こうして、歩兵第十連隊の帰還兵たちには独特の良心の呵責が形成されることになりました。

第六章　『大日本帝国陸軍 歩兵第十連隊（岡山・鉄五四四八部隊）戦史調査資料』紹介ページ

（岩崎純一 著、陸軍岡山歩兵第十連隊・岡山近衛兵将校子孫会 発行、PDF ファイル）

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年三月十三日　更新
二〇一九年十二月五日　最終更新（資料本体を別添資料として別掲）

特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

『大日本帝国陸軍 歩兵第十連隊（岡山・鉄五四四八部隊）戦史調査資料』
（岩崎純一 著、大日本帝国陸軍岡山歩兵第十連隊・岡山近衛兵将校子孫会 発行、PDF ファイル）
（二〇一八年七月十一日に追記：現在、この次の位置に別添資料として収録。）

以下の内容を無料でご覧いただけます。上記リンクをクリックして下さい。学術研究資料として、どうぞ有効にお使い下さい。
新たな情報・証言の確証が取れるたびに更新していますので、ご注意下さい。

1、歩兵第十連隊概要
2、用語説明
3、ルソン島南北地域の戦況の比較
4、歩兵第十連隊戦史年表
5、歩兵第十連隊将校名簿
6、歩兵第十連隊戦友会一覧
参考文献・動画・ウェブサイト

第七章　『大日本帝国陸軍　歩兵第十連隊（岡山・鉄五四四八部隊）戦史調査資料』

二〇一二年　資料収集・調査開始
二〇一六年五月二十二日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一六年十一月八日　更新
これ以降の更新年月日は、本体資料を参照。
資料本体は別添資料として掲載したので、そちらを見よ。
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

第八章　NHK「戦争証言アーカイブス」の岡山歩兵第十連隊、近衛師団、およびそれらの帰還兵についての無料特集番組・証言インタビューの一覧

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年六月二十二日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

フィリピン最後の攻防　極限の持久戦　～岡山県・歩兵第１０連隊～

フィリピン最後の攻防　極限の持久戦　～岡山県・歩兵第１０連隊～

岡山・歩兵第１０連隊　佐藤　春雄さん、市原　毅さん　「飢餓の果てに起きたこと」

岡山・歩兵第１０連隊　平林　克巳さん　「兵站担当の師団参謀として」

岡山・歩兵第１０連隊　佐野　満寿二さん　「戦後の人生はひっそりと」

岡山・歩兵第１０連隊　小野　一臣さん　「戦友の最期を伝え続けて」

岡山・歩兵第１０連隊　光延　一徳さん　「飢え死にか病死する兵士」

岡山・歩兵第１０連隊　横山　泰和さん　「おどろきの米軍の機械力」

岡山・歩兵第１０連隊　畑野　稔さん　「極限の末に見た“地獄”」

昭和二十年八月十五日　玉音放送を阻止せよ　～陸軍・近衛師団～

昭和二十年八月十五日　玉音放送を阻止せよ　～陸軍・近衛師団～

※　以下の無料番組では、岡山歩兵第十連隊の駐留時およびルソン移動後の中国・満州戦線の動向を確認できます。

満州国軍　～“五族協和”の旗の下に～

中国華北　占領地の治安戦　～独立混成第４旅団～

華北・ゲリラ掃討戦　敵は民の中にありて見えず　～島根県・歩兵第１６３連隊～

中国戦線　大陸縦断　悲劇の反転作戦　～福島県・若松歩兵第６５連隊～

満蒙国境　知らされなかった終戦　～青森県・陸軍第１０７師団～

※　以下の無料番組では、岡山歩兵第十連隊による最終戦闘以前のフィリピン戦線の動向を確認できます。

フィリピン・シブヤン海　“戦艦武蔵の最期”（再公開版）

フィリピン・ルソン島　補給なき永久抗戦　～陸軍第２３師団～

ルソン島　悲劇のゲリラ討伐作戦　～秋田県・歩兵第１７連隊～

フィリピン・エンガノ岬沖　～囮（おとり）とされた空母　瑞鶴～

フィリピン・レイテ島　誤報が生んだ決戦　～陸軍第１師団～

フィリピン　絶望の市街戦　～マニラ海軍防衛隊～

第九章　在日米海軍司令部（CNFJ）からの要請と本会からの情報提供

「出征の際の日の丸国旗への寄せ書き」の分析調査（二〇一一年十二月二十一日～）

二〇一六年六月三十日　起筆

二〇一六年七月七日　公開

二〇一七年三月十三日　最終更新

特設サイト「岡将会」

在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

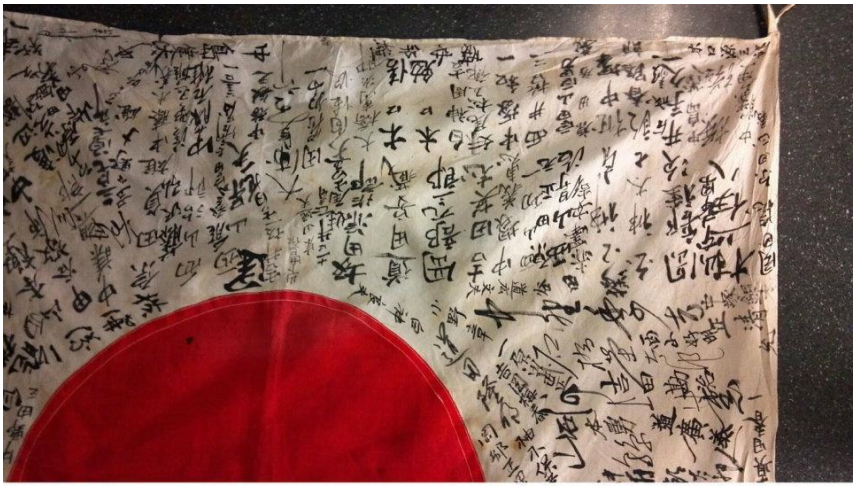
寄せ書きの写真と調査結果

調査の詳細（岡山県南地域に多い苗字や帰還兵の証言との整合性について）

寄せ書きの写真と調査結果

在日米海軍司令部（CNFJ）は、当時米兵が戦地で入手した「出征の際の日の丸国旗への寄せ書き」の所有者（遺族・親族）を探すため、二〇一一年十二月二十一日から公式の Twitter や Facebook で公開し、日本の各団体に情報提供を求めてきたが、本会でも分析した結果、岡山県南地域出身の兵士または部隊に宛てられたものである可能性が極めて高くなった。

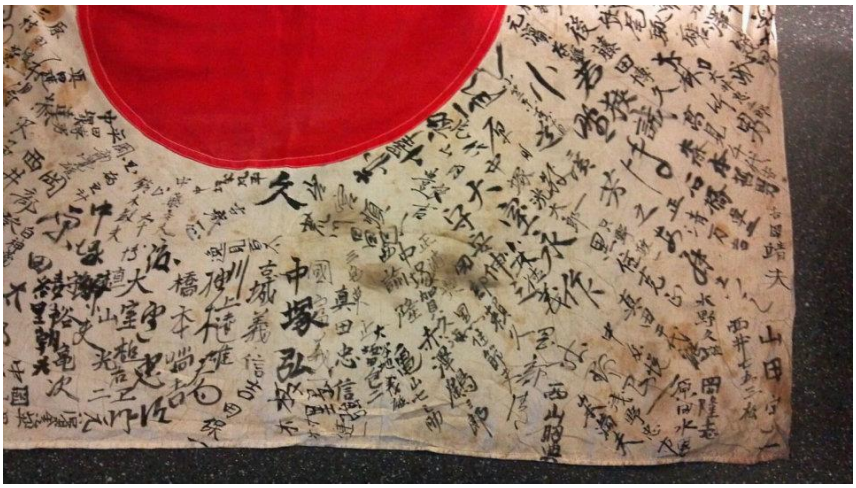
◆在日米海軍司令部（CNFJ）公式 Twitter



◆在日米海軍による情報提供の呼びかけと寄せ書きの写真（1）

◆在日米海軍による情報提供の呼びかけと寄せ書きの写真（2）

◆在日米海軍による情報提供の呼びかけと寄せ書きの写真（3）



◆在日米海軍による情報提供の呼びかけと寄せ書きの写真（4）

出征の際の日の丸国旗への寄せ書き

調査の詳細（岡山県南地域に多い苗字や帰還兵の証言との整合性について）

この「出征の際の日の丸国旗への寄せ書き」が岡山県南地域出身の歩兵または部隊に宛てられたものである可能性を示す最大の根拠は、岡山県南地域に多い苗字の多用である。

歩兵第十連隊の将校には、岡山県南地域に特徴的な苗字はそれほど見られないが、当然ながら論点は「寄せ書きを書いた人たちの苗字と兵士との関係（親族・近隣住民・同胞・婚約者など）」である。

多くの類似の寄せ書きに見られる兵士の宛名（目立つよう大きく書かれる）が、この寄せ書きには存在しないことから、戦地で玉砕直前に連隊歩兵が自分たちで書き遺したものである可能性もある。ただし現在、証言から確認できる限り、多くが兵士の氏名ではなく、銃後の親族や近隣住民の氏名、およびその時点で兵役にない兵士の氏名であると見られることから、戦地での兵士たちの寄せ書きである可能性は低く、在日米海軍司令部の「出征の際」との見解が正しいと考えられる。

また、郷土部隊である歩兵第十連隊などの歩兵以外に、全国から兵士が抜擢された近衛歩兵連隊などに入隊した岡山県出身兵に宛てられた寄せ書きである可能性もあるが、現時点では確認できていない。

◆（A）寄せ書きに見られる主な苗字

赤澤、大室、岡部、岡本、黒住、甲谷、白神、中塚、中藤、西澤、橋本、原田、藤原、正清、道広、守安

◆（A）のうち、岡山県が全国十位以内を占める苗字

赤澤、大室、岡部、岡本、黒住、甲谷、白神、中塚、中藤、原田、藤原、正清、道広、守安

↓　寄せ書きは、岡山県出身の歩兵または部隊に宛てられたものである可能性が大。

◆（A）のうち、次の三つの条件を全て満たす苗字

（1、岡山県内に一〇〇人以上いる

（2、岡山県が最多

（3、岡山県の占有率が全国の三〇％以上）

岡山県に多い苗字（苗字（名字）の読み方辞典）

黒住、白神、中塚（上記サイトでは未記載だが、岡山県が全国の二五％～三五％を占有）、中藤、正清、道広、守安

↓　寄せ書きは、岡山県出身の歩兵または部隊（特に県南地域の歩

兵・部隊）に宛てられたものである可能性が大。

◆（A）のうち、本会会員の祖父や曾祖父たる当該軍人（歩兵第十連隊に限る）の親族または郷土の近隣住民（知人に限る）に見られる苗字

（県南に多い）

赤澤、岡本、北川、黒住、甲谷、白神、戸井、中塚、中藤、長満、原田、藤原、正清、道広、守安、吉川

↓　岡山県南地域の苗字との一致率が高いため、寄せ書きは、岡山県南地域出身の歩兵または部隊に宛てられたものである可能性が大。

◆（A）に限らず、本会会員の祖父や曾祖父たる当該軍人の八親等以内の現在の苗字に、本会会員の婚姻女性の旧姓を加え、県外の嫁ぎ先の苗字を除いたもののうち、岡山県で特にまたは比較的多い苗字

（県全域に渡る）

赤澤、池田、板野、岩崎、岩知道、岩藤、宇垣、岡本、小野、祇園、北川、黒住、甲谷、武田、津村、戸井、土井原、道満、土肥原、頓宮、中塚、中藤、長満、原、原田、藤原、正清、道広、虫明、森、守屋、森安、守安、山本、吉川

↓　岡山県全域の苗字を含めると、実際の寄せ書きの苗字の数よりも多岐に渡りすぎることから、やはり寄せ書きは、岡山県南地域出身の歩兵または部隊に宛てられたものである可能性が大。

◆（A）に限らず、本会会員の祖父や曾祖父たる当該軍人（歩兵第十連隊などの郷土部隊を除き、近衛歩兵連隊など全国の歩兵で編成された部隊を含む）の八親等以内の現在の苗字に、本会会員の婚姻女性の旧姓を加え、県外の嫁ぎ先の苗字を除いたもののうち、岡山県で特にまたは比較的多い苗字

（県全域に渡る）

赤澤、池田、板野、犬養、岩崎、岩知道、岩藤、宇垣、宇喜多、小野、祇園、北川、黒住、小松崎、小松原、津田、津村、土井原、道満、土肥原、長満、花房、虫明、森、森安、守安、安井

↓　岡山県の郷土部隊以外の部隊に所属した岡山県出身兵を含めると、実際の寄せ書きの苗字の数よりも多岐に渡りすぎることから、やはり寄せ書きは、岡山県南地域出身の歩兵または部隊に宛てられたものである可能性が大。また、氏名を書いた者のほとんどが岡山県に特徴的な苗字を持つことから、全国から集まった近衛歩兵などが出兵時に書いたものではない。

同様の指摘をしているサイト

●CNFJ_FLAG の上に書かれた姓名を位置情報ビジュアライズしてみた（こちずふぁん）

●在日米海軍司令部による『出征の際の日の丸国旗への寄せ書き』所有者調査
●CNFJ_FLAG 旗の入手候補地と岡山歩兵第十連隊の戦地

第十章　大東亜共栄圏内の和歌文化（歌壇）の一覧（内地＝本土を除く）（琉球、台湾、朝鮮、中国、満州、サイパン、パラオ、樺太）

二〇一六年六月三十日　起筆
二〇一六年七月七日　公開
二〇一七年三月十三日　最終更新
特設サイト「岡将会」
在日米海軍司令部（CNFJ）、防衛省、岡山県、戦友会、生存軍人とその親族・子孫に提供

大東亜共栄圏各地には和歌文化や神社が残っており、現在では日本人よりも現地の人々のほうが保全活動や掃除をして下さっている状況です。岡山歩兵第十連隊も、中国、満州、台湾、サイパン、ヤップを転戦し、和歌文化を現地に残したようです。

以下の内容を無料でご覧いただけます。総覧の「海外歌壇の形成」のページをクリックして下さい。学術研究資料として、どうぞ有効にお使い下さい。

新たな情報・証言の確証が取れるたびに更新していますので、ご注意下さい。

この和歌関連の調査には、岩崎と本子孫会以外に、伝統和歌の会「余情会」が大きく携わっています。

●琉球の歌壇（琉球桂園派・沖縄三十六歌仙・浦添歌壇）
●台湾の歌壇（臺北（台北）歌壇→臺灣（台湾）歌壇、歌林臺灣の會（かりん台湾の会）・臺灣（台湾）たんがら短歌会、臺灣神社歌壇）
●朝鮮の歌壇（日韓王族歌壇、朝鮮文人報国会、京城詩話会・亜細亜詩脈協会、あしかび会・元山短歌会、真人社、朝鮮歌話会、現在の中道的・反日的またはそれに類する短歌、日韓女子歌壇・現在の朝鮮民族による和歌）
●中国の歌壇（漢民族による和歌）
●満州の歌壇（日満王族歌壇、満州短歌・短歌精神・短歌中原）
●サイパンの歌壇（彩帆（サイパン）・天仁安（テニアン）歌壇）
●パラオの歌壇（パラオ歌壇）
●樺太の歌壇（樺太和歌）

『旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧』

旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧

第四部　科研費助成による研究調査　クンストカメラ（ロシア・サンクトペテルブルク）所蔵　ニコライ二世（当時皇太子）宛献品の解読・所見：　能面・武具の銘文、アイヌ民族の刀剣文化（タンネップ（飾太刀）・エモシ（太刀））や戦史に関する資料、諸岡マツの書状、宮内省『外賓接待録四』、絵巻物（茶道に関するもの））

二〇二〇年六月二十一日～七月二十三日、十月十八・十九・二十四・二十六・二十七・二十九・三十一日、十一月一・二日、十二月二十四・二十六～三十一日、二〇二一年一月九～十一・二十一日　解読作業

解読資料の閲覧は要申込